

梅雨明け後の高温で平年並みからやや早い生育

- 6月初めから低温が続いていた影響で、平年に比べ茎数が少ない傾向が見られましたが、梅雨明け後の高温で分けつが促進され、中間地から高冷地にかけて概ね平年並みからやや早い生育となっています。

適期適量の穂肥で高品質米生産を

- コシヒカリなどの倒伏しやすい品種と、あさひの夢などの倒伏に強い品種とでは、穂肥の施用時期や施用量が異なってきますので、下の表を参考に施用してください。
- 分けつ量が多く、葉色が濃い場合は、施用量を減らして対応しましょう。また、施用時期が遅れたり施用量が多いと玄米祖たんぱく質含有量が高くなり食味が悪くなりますので、注意してください。
- 穂肥を施用する場合は、湛水状態で行い、散布後3～5日は止水してください。

品種別の特徴と施肥基準

品種名	早晚性	耐倒伏性	施肥基準(窒素成分量/10a)	
			施用時期	施用量
ひとめぼれ	早生	やや弱	出穂20日前	2kg
コシヒカリ	中生	弱	出穂18～15日前	2kg
農林48号	中晩生	弱	出穂18～16日前	1kg
あさひの夢	晩生	強	出穂24日前	2kg
農林22号	晩生	弱	出穂18～16日前	2kg
ヒノヒカリ	晩生	やや弱	出穂20日前	2kg

出穂期前後の水管理

- 出穂期前後の水管理は次のようにしてください。
 - ① 出穂前までは間断かん水(2日湛水、2日落水)を行います。
 - ② 出穂～出穂後1週間程度は、稲が最も水を必要としますので、湛水管理で水深3～5cmを保ってください。
 - ③ 出穂後1週間程度～出穂後30日は、間断かん水(2日湛水、2日落水)とし、出穂後30日間は完全落水しないでください。
 - ④ 出穂期に高温となる場合は、胴割れや白未熟粒が発生し品質が低下するので、水交換やかけ流しにより水温、地温の上昇を抑えてください。



斑点米カメムシの発生量がやや多い予想

7月1日に県病虫害防除所が発表した「病虫害発生予察報第4号」によると、**斑点米カメムシの発生量がやや多いとの予報**が出ています。斑点米カメムシは、畦畔や近隣の遊休農地のイネ科雑草で増殖し、稲が出穂すると本田に飛来して加害するので、**出穂2週間程前までに畦畔等の除草を徹底**してください。

また、天気予報によると**12日から22日まで曇雨天**となり、いもち病発生の好適条件となる日が多くなります。畦畔等のイネ科雑草に病斑が見られ、北杜市高根町では葉いもちが出始めていますので、十分注意してください。

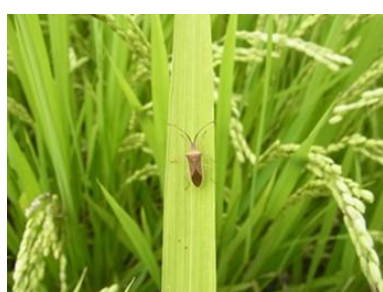
■ 斑点米カメムシ

近年、温暖化に伴いカメムシ類の被害が多くなっています。カメムシは籾を吸汁して斑点米を発生させますが、寄生数が多いと不稔になり、ほとんど収穫できない場合がありますので、次により防除してください。

- ① 畦畔や水田周辺のイネ科雑草から出穂期に本田に飛来すること、また水田内のヒエやホタルイの穂がカメムシの誘因源、発生源になることから、**出穂2週間程前までに畦畔等の草刈り、水田内の除草**をしてください。
- ② 本田への発生が認められた場合は、**殺虫剤を穂揃期と乳熟初期(穂揃期7～10日後)の2回散布**してください。
- ③ 粒剤を使用する場合は**出穂期～出穂7日後までとし、湛水状態(水深3cm程度)で田面に均一に散布し、4～5日間は湛水状態を保ち、散布後7日間は落水・かけ流しはさけてください。**



クモヘリカメムシ



ホソハリカメムシ

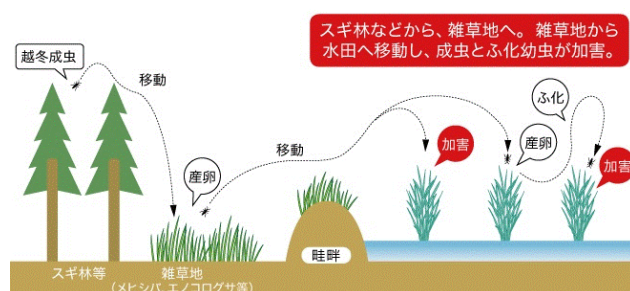


図 斑点米カメムシの生態

■ いもち病(葉いもち)

いもち病は、発生してからでは抑えることが難しい病気です。特にいもち病に弱いコシヒカリなどの品種では、田植前の育苗箱への薬剤処理、本田期での予防散布を徹底することが防除のカギとなりますので、次の点に注意してください。

- ① 葉色が濃い場合は、感染を助長しますので、**圃場を良く見回り、早期発見、早期防除を徹底**してください。
- ② 万が一、葉いもちが認められた場合は、早急にブラシンなどの治療効果のある薬剤を散布してください。
- ③ 粒剤やジャンボ剤を使用する場合、**水深3cm以上を保ち、散布後は少なくとも3～4日間は湛水状態を保つ**てください。また、**散布後7日間は、落水・かけ流しはさけてください。**



葉いもちの病斑



農作業事故・熱中症に注意しましょう!



夏は、水管理のほか、畦畔の除草や病虫害防除などの作業が中心となります。特に除草作業で草刈り機を使用する場合は、事前に機械の点検、危険個所のチェック等を行い、作業時は細心の注意をしてください。

熱中症予防のため、気温が低い朝から午前中にかけて作業を行い、水分補給を忘れずに。